疾患別研修「脳血管障害の後遺症～失語症について～」　報告

１　開催日
令和８年 10 月 22 日（木）　13:00～16:00

２　講師
リハビリテーション西播磨病院
名誉院長　加藤　順一
リハビリ療法部言語聴覚療法科　言語聴覚士　廣坂　陽

３　報告
今年度の脳血管障害にかかる研修では、「失語症」をテーマとし、医師からは、「脳血管障害とは」「失語症とは」「『聞く・話す・読む・書く』への影響」等、総論の話を、セラピストからは、「失語症と伴いやすい高次脳機能障害」の講義や当病院で実施している訓練方法など、幅広い内容で実施しました。失語症の原因、種類や症状、コミュニケーション支援の方法について理解を深める機会となりました。
失語症のある方は、自分の思いや要求を言葉で十分に伝えられない場合があります。そのため、言葉だけで判断するのではなく、表情や身振りなどにも注意を払い、相手の意思を丁寧に確認することの重要性を学びました。
また、その方の言葉を急がさず、返答を待つ姿勢や、絵、文字などを活用したコミュニケーションの工夫が大切であることを再認識しました。

【受講者アンケート（一部抜粋）】
- メラビアンの法則という言葉を初めて知ることができた。コミュニケーションの 8-9 割と多くは、視覚・聴覚の情報で得られる。
- 失語症は、突然、言葉の通じない外国に放り込まれた感覚という表現が、すごく分かりやすかった。
- コミュニケーションノートやカードを利用する事も大切だが、日々接していることで、表情や行動から、患者様がどうして欲しいか、くみ取ることが大切だと思った。待つことの大切さ、分からない時は正直に伝える事、また前向きな声かけをする事が大切だと思った。



